デュマ「銃士三部作」を読む—歴史と文学的想像力（3）『ブラジュロンヌ子爵』前編

Reading Dumas' Trilogy of musketeers, part 3

矢橋　透
Toru YABASE

我々は，長大な「銃士三部作」の内容を要約紹介しながら，おもにそこで展開される歴史観と文学性という観点から作品を分析してきたわけだが，ついに三部作の最終作に到達した。だがこの『ブラジュロンヌ子爵』という作品は，『三銃士』と『二十年後』を合わせたよりさらに分量のある大編であり，それをひとつの論文で扱うことには無理があると思われ，前編と後編に分けて論じていくことにしたい（1）。

『ブラジュロンヌ子爵』の作品世界

本作品は，『二十年後』でダルタニャンたちがフロンドの乱と清教徒革命という激流に巻き込まれていた一六四八年から九年にかけての時期の，ほぼ十年後の一六六〇年に幕を開ける。フランス社会は表面上，十年前とはうって変わった太平な様相を呈している。作品冒頭は，そうした時代の変化を鮮やかに写す。舞台はロワール地方の古都ブロワのガストン・ドルレアンの宮廷であり，若かりしころは権謀術数でなんども最高権力を窺った元王弟殿下も，いまはすっかり老いてパリの中央政界から身を引き隠居生活を送っており，そんな彼のお膝もとのブロワの都市全体がまどろみのなかにあるようだ。だがそんなブロワ城のなか，若々しいふたりの女性の笑い声がこだましている。一方は，前作ですでにブラジュロンヌ子爵ラウルの幼いころからの想い人であることが描かれていたルイーズ・ド・ラ・ヴァリエール嬢であり，もう一方はその友人のモンタレー嬢である。ふたりはともに，ガストンの宮廷侍女を務めているのだが，陽気なモンタレーが，内気なルイーズがラウルへの手紙を書くのをからかっていたのだ。そこに，当の子爵が突然現れる。彼は，ルイ一四世がスペイン国王の娘マリー＝テレーズと結婚するため国境へと向かうとちゅう，ブロワに立ち寄ることを先ぶれに来たのである。ラウルとルイーズは再会を喜ぶが，前者の熱狂ぶりにたいし後者はどことなく戸惑っている様子。この温度差を持ったふたりの恋人たちをも巻き込んだ宮廷の一大恋愛絵巻が，この三部作最後の作品の中心的ストーリーのひとつをなしていくのである。

さてルイ一四世は熱狂的にブロワ市民に迎えられるが，政治の実権はいまなお宰相マザランが握っており，その夜の宴ではみながマザランのもとにすり寄り，若い王は面白くない。だがルイは，近いうちに来るであろうマザランの死ののちには，絶対的な権力を掌中にすることを念じていた。翌早朝，銃士隊副隊長ダルタニャン（『二十年後』の最後で隊長に任命されたのだが，戦乱が終わると再び大貴族にその地位を譲らされていたのだ）を伴った王は，人気のないロワール河畔に赴き，恋人であったマザランの姪マリー・マンシーニと決別する。彼は若気の恋を清算し，スペイン王の娘と結婚することで，長年にわたったフランスとスペインのあいだの敵対関係に終止符を打つと同時に，宰相の影響下から離れることをも企図していたのである。こうしたルイ一四世の，ポストマザランの権力闘争が作品のもうひとつの中心となる。

だが我々は，それらフランス国内の物語に行きつくまえに，いま一度ドーヴァー海峡を渡らなければならない。「イギリス王政復古」の物語である。ルイ一四世がブロワに着く少しまえに，清教徒革

命で断頭台の露と消えたイギリス国王チャールズ一世の同名の息子が，当地のとある旅館に居を定めていた。彼は国を追われて以降，フランスやオランダなどヨーロッパ大陸を転々とする流たくの王となり果てていたのだが，いま一度本国に舞い戻り最後の運を賭すべく，従兄に当たるルイ（息子チャールズの母は，ルイ一三世の妹にあたるアンリエット王妃である）に金銭的もしくは人的援助を頼みに来たのである。しかしチャールズのための援助をマザランに願い出たルイは，フランスとイギリスのあいだの内政不干渉条約を盾に，あえなく拒絶されてしまう。万策尽きはてたチャールズは悄然と帰途に就くことになるが，そこで偶然ある貴族の屋敷まえでひとりの老人に最敬礼される。それはことあろう，父王の面影を息子に認めた，アトスつまりラ・フェール伯爵の従僕グリモーであり，その屋敷は伯爵のものだったのである。チャールズがかつて父王のために死を賭して働いてくれたことの礼を言うために伯爵を訪ね，自らの悲惨な身の上を物語ると，アトスはひとつの驚嘆すべき事実を話す。それはチャールズ一世が処刑されるまえに，断頭台のしたに潜んでいたアトスにひそかに，ニューカッスル近郊の修道院跡に財宝を埋めており，いつの日かスチュアート朝復興の機運が見えたさいには，それを使ってほしいと言い残したというのである。チャールズが首をはねられるまえに言った「覚(リ)えて(ンバー)おれ」という謎めいた言葉は，アトスに向けられたものだったというわけだ。ラ・フェール伯爵は王の息子に，自らイギリスに赴きその財宝を持ちかえることを約し，王朝再興のためふたたび命がけで働くことを誓う。さてところが，ここにもうひとり火中の栗を拾おうとする男がいた。ダルタニャンである。彼は，自らの仕える国王が宰相に頭を押さえられ，大事のためにわずかな金を捻出することもできず，恋を貫くこともできないのを目の当たりにして愛想を尽かし（後者に関しては，前述のとおりルイには遠望があったわけだが），退職を願い出，隣国に乗り込んで王政復古という大挙実現に賭けようとする。アトス，ポルトス，アラミスという盟友を引きこもうとそれぞれを訪ねるがなぜか全員が留守で（アトスは当然として，他のふたりにものちに見るようにしかるべき理由があったのだが），しかたなく，かつての従僕でいまは食料品店主でブルジョワになっているプランシェのもとに寄り，イギリス王政復古という共同事業のための会社設立という触れ込みで（このあたりは，デュマらしい資本主義的発想が認められて面白い），軍資金を得，軍人崩れの猛者を十人ほど雇って軍団を形成し，オランダを経ていざイギリスに乗り込む算段を付ける。

ところでこの時期のイギリスの状況はというと，クロムウェル亡きあと，後継者に想定されていた息子が政治的無能のため護国卿の地位を放棄すると，内乱状態に突入し，議会の権限を重視するモンク将軍と，護国卿の独裁的権力への志向の強いランバート将軍のあいだで国内は二分され，両者がニューカッスルを境に対峙し，一触即発という事態であった。さてアトスとダルタニャンは，同じ目的のためイギリスに乗り込んでいることを互いにまったく知らぬまま，ともにモンク将軍にニューカッスルの陣営で――対照的なやり方で――接触することになる。アトスは名門貴族らしく，モンクに直接面会を求め，自らが先の清教徒革命の動乱のなかで修道院の廃墟のなかに埋めたという財宝を掘り起こす許可を求める。将軍はアトスの高貴な物腰に動かされ，自ら単独で廃墟に同行し（そこにたまたま，フランスから流れ着いて，魚を物資が不足するモンクの陣営に売ったばかりの漁師が，燈火を持つために同行したのだが），財宝を無事見出す。だがその後アトスは，自らの素性とその財宝がチャールズのものであることを明かし，イギリス国内の安定のため王政復古に手を貸してくれるよう願い出る。それにたいしモンクは，チャールズは自分が国王にふさわしい人間であることを一度も証明したことがないと切り捨てたあと，彼が王にふさわしい行いを見せ，議会が歓呼の声で迎えるような状況になったときには，王に手を差し伸べるつもりがないでもないと含みを持った返答をする。さらに将軍は，内乱の戦況を見極めるためいま少しイギリスに留まってほしいむねアトスに告げ，ふたりは別れる。ところが翌朝アトスは，驚くべき事実をモンク軍の参謀たちから聞かされることになる。モンクが彼との会談のあとすぐ，忽然と失踪したというのだ……

というのも，将軍は漁師に変装したダルタニャンらの一行によって拉致され，箱詰めにされて，チャー

ルズのいるオランダの港町スヘーフェニンヘンへと運ばれていたのである（！）。ダルタニャンはモンクをチャールズに委ね，彼と交渉するなり人質とするなり自由にするように言う。それにたいしチャールズはモンクに，まずこの不意打ちはダルタニャンが彼のためを思って個人的意志で行ったことであり，自分とアトスの行動とはまったく無関係であることを明言し，さらにただちに将軍を自由の身にして帰国を許すことを告げる。モンクは，自らが侮っていた若者からこのような王族らしい寛容な行為がなされたことに感銘を受けるが，国内の風雲急を告げる状況を思い，すぐにダルタニャンを伴って帰国する。ニューカッスルに着いた彼らは，アトスとグリモーが泊まっていた宿がモンク軍によって包囲され炎上しており，銃撃戦になっているのを見出す。アトスは当然のことながら，モンク失踪の主犯者と見なされたわけだが，当の将軍の帰還により間一髪で難を逃れ，ダルタニャンと思いもかけぬ再会を喜ぶ。さてその後戦局は，大義を持たぬランバート軍が自然分解して行ったのに乗じ，モンク軍がロンドン入場を果たし，勝利を収めることになる。そしてモンクは，急進派を追放した新議会を開き，その意志によってチャールズ二世をオランダから呼び寄せる。このことにより，十年あまり続いた清教徒支配が終わりを告げ，スチュアート王朝の復興が成ったのである。アトスとダルタニャンにとってもそれは，『二十年後』での国王処刑という痛恨の悪夢からの解放であった。ロンドンに入場したチャールズは，祝宴に王政復古のまさに「陰の立役者」であるふたりのフランス人を招き，一方にはヨーロッパでもっとも栄えある勲章のひとつである金羊毛勲章を，他方には三十万ポンドという南仏の貧乏貴族の末裔が見たこともない大金を賜る。モンクに，彼を箱詰めにしてドーヴァーを渡ったという噂を広めることをちらつかせて，彼からちゃっかりイギリスの豪華な別荘まで手に入れたダルタニャンは，パリへと凱旋し，共同出資者プランシェと溢れかえる金貨をまえに心から喜びあったのであった。

こうしてアトスとダルタニャンがイギリスで大仕事を成し遂げているあいだ，フランスでは権力中枢に大きな変化が訪れようとしていた。十年以上にわたりフランスとヨーロッパの政治を牛耳ってきたマザランが，いよいよ臨終の時を迎えたのである。宰相は死ぬにさいし，若き国王にふたつのものを残していった。莫大な財産の一部（それだけでも，それまで個人で自由に使える金をほとんど持たなかったルイにはとてつもない金額であったのだが）と，コルベールという優秀な財政専門家である。そして宰相亡きあと絶対的な権力を握ろうとしているルイのまえには，ひとりの強大な敵が存在していた。財務大臣の地位を利用してとてつもない金を自由にし，広大な宮殿と多数のお抱えの芸術家を有し，まさに王のような生活を享受していたニコラ・フーケである。こののちルイとコルベール（彼もフーケを深く憎んでいた）は共同して，執拗なフーケの追い落とし作戦を行っていくことになる。そしてそのためには，手足となる有能な人材が必要となる。白羽の矢が，ダルタニャンに立つ。さて作戦はまず，フーケの財政基盤を狙って行われた。財務大臣はそれまで，幼なじみの徴税請負人たちと結託することで税収入を自由に裁量してきたのであるが，ルイとコルベールは，そのふたりの徴税請負人を逮捕し，公金横領のため処刑するという思い切った手に打って出る。だが，そのことを恋人のベリエール侯爵夫人からいちはやく聞いたフーケも反撃に出る。処刑が行われる前日にバスチーユ牢獄に赴き，その所長を懐柔して友人たちを脱獄させようとする。だがそれは，囚人たちが間一髪はやくヴァンセンヌ牢獄に移送されたことで，失敗に終わる。つぎにフーケは，まさに処刑が行われようとしているグレーヴ広場で，友人たちを奪取するという大胆な作戦を立てる。素行が悪く都市の闇世界と交流のある実弟のフーケ司祭に依頼し，ごろつきたちに民衆を扇動させて血税を横領していた請負人たちを自ら火刑に処すよう仕向け，その間隙をついて脱出させようというのである。この作戦はまんまと成功するかに見えたのだが，その場に居合わせたダルタニャン（財産のできた彼は，広場に面した居酒屋の入った家屋を買い取っており，その家賃をたまたま徴収に来たところだったのだ）とラウルが超人的な活躍で暴動を抑え，囚人を確保して絞殺刑を予定通り行わせる。ことの次第を知ったフーケは，ダルタニャンの度外れた力量を意識し，ダルタニャンの方も給料を受け取るため会った

フーケの鷹揚で優雅な物腰に尊敬の念を覚える。

ルイのフーケ追い落とし作戦の第二弾は，軍事的側面を狙って行われる。フーケは，そのお膝下であるブルターニュ地方にあるベル・イルという島に，国王に無断で要塞を築いているという噂があり，こうした国王による軍事力の完全掌握への重大な違反である事態を，ダルタニャンを派遣して調査させようというのである。商人に身をやつしてベル・イルに乗り込んだダルタニャンは，その島に強大な要塞と砲台が築かれていることを発見するが，そこに思ってもみなかった知人を認めて驚愕する。それはなんと，巨人ポルトスことデュ・ヴァロン男爵であったのだ。そしてさらに驚くべきは，ポルトスがベル・イルの最新型の要塞の設計を担当しているというのである。これには裏があると直感したダルタニャンは男爵とともに，ベル・イルと目と鼻の先のヴァンヌでいまや司教の座に納まっているアラミスことデルブレー猊下に会いに行く。地元でたいへんな尊敬を集めている様子の司教と再会を果たした銃士隊副隊長は，男爵とともに豪華な夕食をいただきつつ，お互い腹の探り合いをする。そのさいダルタニャンが確信したのは，政治的野心の強いアラミスがフーケと結託しベル・イルの要塞化を推進していること，そしてその手足となってポルトスが働いていることであった。ところが翌朝隊長が起きると，男爵は姿を消していた。司教は友人をもてなすための獲物を狩りにでも行ったのだろうというが，いっこうに帰ってこない。じつはデュ・ヴァロンは，デルプレーの差し金で，いちはやくことの急を知らせるために，パリのフーケ邸に向かっていたのだ。様子を見に行ったダルタニャンが帰ってみると，アラミスも姿を消していた。謀られたことに気づいたダルタニャンは，まさに風のようにパリへと疾駆するが，首都では急を知らされたフーケが，すぐさま自らベル・イル要塞を国王に献上していた。そのことによって，国王への反逆罪の疑義を未然に防いだのである。その直後にルーヴルに参上したダルタニャンは，ことの次第を国王から聞かされほぞを噛むが，国王は今回の働きにたいし，（マザランと異なり今度こそ本当に）彼を銃士隊隊長に任命することで報いる。だがここに，かつて一心同体を誇った銃士たちが，国王とフーケの権力争いに巻き込まれ，敵と味方に分かれて争うことになったことが判明した。ルイはその後も，弟であるフィリップ殿下のイギリス王女との結婚費用であるとか，フォンテーヌブローでの宴であるとか，ことあるごとにフーケに多額の出費を要求し，財政的基盤を失った財務卿を追いつめていくことになる。

こうしてルイとフーケの権力闘争が進行しているあいだに，もうひとつの戦いが始まろうとしていた。宮廷の恋の戦いである。発端は，王弟殿下の妃としてイギリスからアンリエット姫が輿入れすることであった。姫は国王チャールズ二世の妹であり，母親はルイ一三世の妹君のアンリエット太后であるので，ルイやフィリップとは従妹にあたり，また幼い頃は流たくの身でフランス宮廷に仮住まいしていたから，幼なじみでもある。そうした姫がいまや美しく（また挑発的に）成人して，いわば凱旋帰国をするようなものなのである。華やかな王弟殿下妃の宮廷に仕える侍女のポストには，希望者が殺到する。そんななか，ブロワのガストン・ドルレアンの宮廷にいたモンタレー嬢とラ・ヴァリエール嬢も，モンタレーの恋人であるマリコルヌを通じて，侍女の職を得る。かと言ってブルジョワのマリコルヌが宮廷に顔が利くはずはなく，彼が金を貸しているマニカンという貴族の友人が，宮廷一の伊達男という評判のギーシュ伯爵のお気に入りで，さらにその伯爵が王弟殿下の寵臣であったからで，何重もの縁故を辿ったすえでのことであった。（ギーシュがラウル・ブラジュロンヌと親友であることが，『二十年後』ですでに描かれていたことも想起されたい）。

さてギーシュとラウルは，フランス宮廷を代表してアンリエット姫を迎えるために，英仏海峡に面したル・アーヴルへと赴き，荒れた海にもめげずイギリス船へと乗り込み，歓迎の挨拶を行う。ところが，この船のうえですでに恋の火花が華々しく散ることになる。というのも，船にはイギリスでアンリエットの恋人であったバッキンガム公爵（『三銃士』でアンヌ王妃と激しい恋物語を演じた，あのバッキンガムの息子）が姫をフランス宮廷まで送り届けるという名目で乗り込んでおり，いまだ姫を独占せんと身構えていたところに，ギーシュが一目で姫への恋に落ちてしまったからであり，英仏

を代表する名門貴公子ふたりはここからパリへの道中姫を巡って激しい感情的つばぜり合いを行うことになる。ラウルのとりなしがなかったら，それは血を見ないではいなかったかもしれない（だがその子爵も，彼とダルタニャンにたいするぶしつけな言葉を弄してくる，同じくギーシュの友人であるワルド伯爵と険悪な仲になるのであるが。じつはこの男，古くは『三銃士』で，ダルタニャンがその名を騙ってミレディーと床をともにした同名の貴族の息子であり，父の恨みを引きずっているのである）。パリに着いても，バッキンガムのアンリエットへの恋の攻勢は留まるとことを知らず，ついに王弟フィリップ（同性愛的傾向の強い彼は，ふだんあまり女性には関心がないのであるが）も，嫉妬に身を焦がし，母親のアンヌ太后に直訴する。アンヌは古の恋人の面影を濃厚に宿すイギリス貴族を私室に呼び，優しく道理をさとし，帰国を同意させる。そんななか，宮廷の宴でダルタニャンがワルドを呼び止め，伯爵が彼の貴族としての家柄の低さや，ラウルの母親が知られていないことをことあるごとに悪しざまに言っていることを問いただし，自らの彼の父にたいする仕打ちを若気の過ちとして謝ったうえで，今後陰口をきくのをやめ，ラウルにたいし謝罪しないならば，侮辱罪として投獄も辞さないと告げる。やり込められたワルドは行き場のない怒りに捉われるが，ここにもうひとり同様の感情に捉われていた男が，彼の相手になると言う。バッキンガムである。彼は自分がイギリス貴族であり，決闘を禁じるフランスの法に従う義務はないので，友人であるブラジュロンヌの代理として彼と勝負しようと言うのである。実際バッキンガムの帰国に合わせて，英仏海峡を望むカレーまで同行したふたりの貴族は，潮の満ちてくる砂浜を舞台に（それは，まさに人間のつくった国境を曖昧にする「神の領土」なのだ），赤く染まる夕暮れを背景に，壮絶な死闘を演じる。かろうじて勝利したバッキンガムも敗者ワルドも，戦いの終わった時点では自らの足で船に乗り込むこともできない瀕死の状態であった。

こうしたアンリエットを巡る宮廷の頂点での華々しい恋愛葛藤の陰に隠れて，いまひとつひそやかな恋の物語が展開していた。ラウル・ブラジュロンヌとルイーズ・ド・ラ・ヴァリエールの一件である。思いもかけず許嫁を王弟殿下妃の宮廷に見出した子爵は，理由のない胸騒ぎに捉われ，彼女との結婚を早めようとして，父ラ・フェール伯爵に承諾を得に行く。伯爵はこの結婚にはもともと乗り気ではなかったのだが（有力な係累のないラ・ヴァリエールが，ラウルの宮廷貴族・軍人としての出世にふさわしくないという思いとともに，女性というものを信用していないアトスのミソジニー的直感が働いていたとも考えられる），愛する息子の意を尊重して，子爵が仕えるルイ一四世に結婚の同意を求めに行く。だがルイも，ラ・ヴァリエールが幼いころの事故で足が悪く（あまり美しくない，と王は言った），また財産もないため，子爵の輝かしい将来のためにならないということで，即座の同意を与えなかった。このルイの行為が今後，宮廷の恋愛絵巻にきわめて甚大な影響を与えるであろうことを，この時点では登場人物の誰も気づいていなかった。だがそれは，ことあろうルイがルイーズと恋に落ちるという意想外の展開に発展し，ラウルとルイーズという控えめなカップルと，王公たちの恋の行方をいっきょに交錯させ，ひいてはフランスの政治にも小さくない影を落とすことになるのであった……

歴史のなかの虚構の人物ふたたび――「歴史異聞」最後の栄光

この三部作最後の作品（の前半部）でも，その主要な三つの物語において，『二十年後』同様，実際の歴史的事件のなかに虚構の人物が配される構成がなされている。

まずイギリス王政復古に関してであるが，それは，クロムウェルの死後内乱状態になったイギリスにおいて，政局を掌握したモンク将軍が，穏健派からなる仮議会を開き，その議会の意志によりオランダからチャールズ二世を呼び戻し即位させたことにある。議会の承認によって国王が即位したという事実により，国王と議会の権威の併存という，これ以降のイギリス政治の基本的枠組みが定まった

ことにその歴史的意義があるとされる（だがその後チャールズは，ルイ一四世と，バッキンガムも参加したキャバルと呼ばれる親フランス派の徒党の影響力により，ふたたび国王独裁的傾向を志向するのであり，それがのちの名誉革命へとつながっていく）（２）。デュマは，こうしたモンク（議会）とチャールズ（国王）の（一時的）和解の背後に，アトスとダルタニャンというふたりのフランス人の硬軟対照的な介入があったという奇想天外な展開を挿入し，読者の興味を惹きつけている。

つぎは，ポストマザランの権力闘争である。長年にわたりフランスとヨーロッパの政治を牛耳ってきた宰相の死後，ルイ一四世がコルベールと結託して，莫大な財政的基盤のうえで，国王を上回る輝きを放っていたフーケ財務卿を追い落とす行動に出たことは歴史的事実である。そしてフーケ逮捕後の裁判において，その主要な嫌疑となったのが，『ブラジュロンヌ』の前半部でも主要な物語を形成している，「公金横領」とベル・イルの要塞化を含む「国王反逆罪」であった（３）。デュマはそこに，フランス国王に忠実であり続けるダルタニャンと，フーケ派とくにかつての僚友アラミスとポルトスのあいだのまさに手に汗握る攻防戦を創作し，強力なエンターテインメント性を創出している。

最後は宮廷の恋愛絵巻であるが，これも基本的に歴史的事実に沿った展開がなされている。ルイ一四世は，宰相の姪であるマリー・マンシーニと激しい恋に落ちていたが，それを振り切ってスペイン王女マリー・テレーズと一六六〇年に結婚した。そしてその翌年王弟フィリップのイギリス王の妹アンリエットとの結婚が続き，一気に若返ったフランス宮廷は，華やかな雰囲気に湧きかえった。とくにアンリエットの登場は，ミシュレによれば「新しい治世の曙光」（４）であった。宮廷のアイドル的存在となった彼女の周りには，バッキンガムやギーシュを初め宮廷の貴公子たちがたむろし，のちにはその輪のなかにルイ王自身が加わることになるが，こうした過程は，『ブラジュロンヌ』の後半が写していくことになるだろう。そしてやはり作品後半に恋愛絵巻の中心になるのが，王とラ・ヴァリエールの恋であり，そこにいやおうもなく巻き込まれていくのが，ラウル・ブラジュロンヌ子爵であるわけだが，じつは驚くべきことに，この王とラ・ヴァリエールそして子爵の三角関係にも歴史的裏付けがあるのである。ラ・ファイエット夫人の『アンリエット王弟殿下妃伝Histoire de Madame Henriette d'Angleterre』，またブラジュロンヌ自身の肖像画に書かれた銘に，ルイ一四世＝ラ・ヴァリエール＝ブラジュロンヌの嫉妬を含んだ感情的関係が記されているのだ（５）。デュマは，この実在のブロワに領地のある貴族と，アトスの息子という設定を合体させることで，王とアトスやダルタニャンらの複雑な愛憎関係を創造し，それが作品後半の中心的テーマとなっていくのである。

このように，『ブラジュロンヌ子爵』の前半部を構成する三つの挿話は，いずれも実際の歴史的事件のなかに虚構の人物が配される――『二十年後』と同様の――構成になっている。しかし，イギリス王政復古の挿話と二つのフランスの挿話では，その展開に重要な相違があるのも事実である。最初の挿話では，イギリス王政復古のまさに陰の立役者がふたりのフランス人であったという，虚構の人物の存在によって歴史的事件の実相が改ざんされる「歴史異聞」手法の典型的使用が見られるのだが，フランスの挿話では，主体であるのはあくまでルイ一四世で，ダルタニャンやラウルは重要な役割を果たすものの受動的副次的役割を強いられており，また歴史の大きな流れは事実と変わらず，その内実が書き換えられるには至っていない。そして先取りして言っておけば，こうした傾向は『ブラジュロンヌ』の後半ではさらに強まっていくのであり，「歴史異聞」手法は，今回のイギリス王政復古の挿話で最後の栄光の時を迎えると言ってもよいのである。

歴史的主体性の栄光と後退

我々は，「銃士三部作」の最初のふたつの作品で，ダルタニャンら銃士たちがリシュリューやマザランといった時の最高権力者と渡り合い，ときに歴史の流れを自ら変えることで，国民国家における人民の歴史的主体性の意識を覚醒（＝ねつ造）してきたのを見てきた。この三部作最後の作品の前半

部でも，同様の傾向はイギリス王政復古のエピソードに端的に表れていると言える。チャールズ二世とモンク将軍を和睦させ，国王と議会の権威の併存に道を開いたのが，じつはふたりのフランス人であったという「歴史異聞」的展開は，まさにそうした人民の歴史というコンセプトにかなうものであろう。「君主と議会の葛藤」というプロブレマチックは，一九世紀においてもいまだ――ロマン主義文学者たちも一様に関心を寄せた――「世紀の政治的大問題」（６）であり，当然七月王政期においても大いにアクチュアリティを持つものであったのである。

しかし，前節でも述べたように，こうした読者の歴史主体の意識を鼓舞する痛快な展開は，『ブラジュロンヌ子爵』という作品においてじつはこれが最後と言ってよい。というのもフランスに帰ったダルタニャンらを待ち受けていたのは，ルイ一四世という絶対君主誕生の物語であるのだから。ルイは，自らの絶対的権力獲得の障壁となるフーケの追い落としに邁進していき，ダルタニャンはまさにその手足となって，個人的には敬意の念を抱いたフーケ，そしてなにより，親友であるアラミスとポルトスと敵対関係に入っていかざるをえない。ダルタニャンは，徴税請負人の処刑やベル・イル偵察の場面でまたしても超人的活躍を見せるが，それが前二作でのような爽快感を感じさせないのは，それがルイの意図に沿った，ダルタニャン自身の主体性とは別の方向で行われるからだろう。こうした傾向は，『ブラジュロンヌ子爵』の後半で加速していくことになる。

宮廷社会，文明化，女性

さて『ブラジュロンヌ子爵』において，国王の絶対権力とともに，ダルタニャンら剣士の痛快な活躍の場を奪っているもうひとつの要素がある。それは，洗練された宮廷社会と，そこに君臨し始めた女たちの存在である。王弟殿下妃アンリエットの登場とともに宮廷を席巻し始める華やかな恋愛絵巻が，銃士たちの荒々しい暴力的世界を駆逐し始めるのである。ここには，ヨーロッパ文化史におけるある根底的な変化が写しとられていると考えられる。ドイツの社会学者ノルベルト・エリアスは，その古典的評価を得ている二冊の著作（７）において，ヨーロッパの「文明化」の起源としての，フランス「宮廷社会」の成立について語っている。一六世紀においては，貴族たちはおのおのの領地において気ままな生活を送っていた。それがアンリ四世の時代，世紀が変わるくらいから，国王が貴族を中央の宮廷に集め，厳しい礼儀作法を押しつけることで，反抗につながるその暴力的性癖を抑えようとし始めた。そして貴族はしだいに，国王と彼ら相互の監視の網の目のなか，剣に自己表現を見出す暴力的傾向を失って，（貨幣経済の浸透により）経済的にも依存の傾向を強めていた国王におもねり，その階層秩序における序列に存在意義を見出す，廷臣と化していったのである。こうした傾向が完成の域に達するのが，ルイ一四世の宮廷なかんずくヴェルサイユ宮であり，それが「文明化」の礎となり，ヨーロッパ各地の宮廷へと広まり，さらには階層の枠を超えて広まっていったというのが，エリアスの有名な文明化論である。そして，このような洗練された社会においては，女性が大きな力を持ってくる。とくに国王の寵愛を得た女性は，まさに宮廷社会の中心として輝き始めるのである。

『ブラジュロンヌ』の前半部が描く時代においては，いまだヴェルサイユ宮は着工されておらず，ルイを中心とする階層秩序も――もうひとつの太陽フーケの存在によって――完全には構築されていないが，その文明化の度合いは，『三銃士』や『二十年後』の時代の比ではない。そこでは，『三銃士』における，決闘が――リシュリューの決闘禁止令にもかかわらず――日常化した暴力的世界とは，雲泥の違いのある世界が展開されている。ギーシュ，バッキンガム，ブラジュロンヌといった新時代の騎士たちは，アンリエットら女主人の視線のもと，たとえ恋の嫉妬に狂いそうになっても，自己抑制を行い，容易には暴力沙汰を起こさない。こうしたフランス貴族社会における大きな変化を，デュマの筆はじつに的確に描き出していると言える。またこうしたコンテキストから，今回採りあげた前半部の最後で描かれるバッキンガムとワルドの決闘は，象徴的な意味を有していると言える。ともに爆

発寸前の鬱憤をためた彼らは，宮廷の近くでその感情を解放することができず，遠く離れたカレーの地で，しかも波打ち際という「神の領土」で決闘を行う。そして彼らの背後でまがまがしい赤色に染まる残照は，あるひとつの時代――貴族が剣の力によって最高の自己表現を行いえた時代――の終わりを，明瞭に告げていると考えられるのである。今後は，女性と廷臣の時代がやってくる――『ブラジュロンヌ子爵』という作品は，そのことを驚くべき的確さで提示しているのだ。

老いの影――時の破壊力

『三銃士』が青春の物語であり，『二十年後』が壮年の物語であるとしたら，『ブラジュロンヌ子爵』は老年の物語である。四銃士のなかでもっとも若いダルタニャンですら老いを感じ，たえずそのことを口にする（もちろん三部作最後の作品には，ラウルら若い世代の中心的人物も出てくるのだが，前述のように彼らは，四銃士の若いころのような活力を感じさせない）。だが『ブラジュロンヌ』という作品の印象をもっとも暗くしているのは，『三銃士』で一心同体を誇った銃士たちが，完全に袂を分かってしまうという事実であろう。『二十年後』でも彼らは，初めフランスでの場面では国王派とフロンド派に分かれるのだが，イギリスでの清教徒革命の場面以降，ふたたび結束して難局に立ち向かった。しかし今回は，決定的に国王派とフーケ派に分裂し，それは終局に至るまで変わることはない。ここには，人生はもっとも堅固と思われていたものすら変えてしまうという苦い認識があり，鉄壁を誇った銃士たちの団結の崩壊は，ある批評家が言うように（８），アーサー王の宮廷の崩壊に似たような，衝撃とデカダンスの感覚を読者に与えるのである。

銃士たち以外で三作品を通じて登場するのは，銃士たちの従僕――彼らは，それぞれのキャラクターはそのままに年老いてゆく（使い走りからブルジョワに出世するプランシェだけは別であるが）――を除けば，アンヌ・ドートリッシュであるが，彼女こそ時の暴力をもっとも残酷に被っていると言える。『ブラジュロンヌ』では，乳がんに侵された彼女は，その若き日の美貌を完全に失っているのである。シモーヌ・ベルチエールも言うように，アンヌの三部作におけるイメージは，若いロマンチックな恋人（『三銃士』），傲慢さと繊細さがない交ぜになった誇り高き女王（『二十年後』）という中心的形象を経て，息子たち王族の家庭への助言者（『ブラジュロンヌ子爵』）という周辺的形象へと後退している（９）。今回扱った前半部では，息子フィリップの家庭の平穏のため，かつての恋人の面影を留めるバッキンガムに優しく帰国を促すという儲け役が与えられているが，後半部では，（「鉄仮面」のエピソードで）息子の出生に関する，恐ろしい権力の暗部に直面することを強いられることになる。このように『ブラジュロンヌ子爵』という作品には，時間の持つ破壊的な力というテーマが濃厚に漂っており，『二十年後』における人生の味わいを増す熟成の香りとは，また異なった時間的主題が濃厚になってきていると言える。

こうした『ブラジュロンヌ』を蔽う前二作とは異なる暗い色調は，タディエも指摘するように（10），作者の人生の変化と関係づけることもできるだろう。『三銃士』（一八四四年刊），『二十年後』（一八四五年刊）がデュマの作家人生のまさに絶頂期に執筆されたのにたいし，『ブラジュロンヌ子爵』（一八四八－一八五〇年刊）の執筆期において――実際には数年しか間がないのにもかかわらず――デュマの作家人生は大きく傾き始めていた。巨額の費用を投じて鳴り物入りで始めた自作小説上演のための「歴史劇場」が，四八年の二月革命の影響もあって経営悪化の一途を辿り，破産の影が確実に忍び寄っていた。また二月革命以降，共和派のデュマはいくつもの選挙に出馬するが，いずれも落選の憂き目を見ていた。四八年の時点で四六歳のデュマは，それまで破竹の勢いで快進撃を続けてきた自らの人生に暗雲が垂れこめてきたことを感じざるをえなかったろう。前節で見てきた，絶対王権の伸長による人民の歴史的主体性の後退や，文明化された宮廷社会の成立と廷臣の蔓延による騎士道的伝統の衰退という事態は，デュマ（と共同執筆者の元歴史教師マケの）の一七世紀史にたいする的確な歴

史認識を示してはいるが，それが登場人物たちの老いとも絡んで，『三銃士』の生の喜びに満ちた世界からのデカダンスの相貌のもとに描き出されるのには，こうしたデュマの人生の傾きが影を落としていると考えられるのである。

以上，『ブラジュロンヌ子爵』の前半部を見てきた。そこでは，大きな三つの挿話において，歴史的事実のうちに虚構の人物が配される前作と同様の構成が見られるが，前作で全面的に展開された「歴史異聞」の手法が真に有効に機能しているのは最初のイギリス王政復古のみであり，以降のフランスでの挿話では虚構の人物が歴史的事実にいわばのみ込まれていくような観を呈しており，それゆえ人民の歴史的主体性の主張も後退しているように見える。それは，絶対主義王権の伸長と文明化された宮廷社会の到来という，近代史の重要な局面をデュマが的確に描き出していることだと言えるのだが，イギリス王政復古の挿話以降は，『三銃士』の生き生きとした青春の世界が反転したような，時の破壊力を濃厚に感じさせる老年の世界が――もちろんそれは，デュマの持ち味であるユーモアに富んだ闊達な文体によって中和されてはいるが――展開されることにもつながっている。こうした傾向は，作品の後半部にいたってさらに強まり，カタストロフへと流れ込んでいくことであろう。次回はいよいよ，三部作の最終局面を検討する。

註

（1）『ブラジュロンヌ子爵』のテクストと翻訳は，以下を参照。Dumas, *Le Vicomte de Bragelonne*, I-III, Gallimard, folio classique, 1997. デュマ，『ダルタニャン物語』（鈴木力衛訳），講談社文庫，第六－一一巻，一九七五年。その前半を扱う本論考では，全二六六章中の一〇三章（講談社文庫版では第八巻第一〇章）「神の領土Le terrain de Dieu」までが扱われる（ただし，混乱を避けるため，「鉄仮面」に関する章の記述は，すべて次回に回すことにする）。

（2）Cf. G.M.トレヴェリアン，『イギリス史』（大野真弓監訳），みすず書房，一九七四年，一七四－一八四頁。

（3）近年の研究によれば，実際にはこうしたフーケの嫌疑は疑わしく，裁判自体が国王によるでっちあげ的色彩が強かったことが指摘されているという。*Cf. Dictionnaire du grand siècle*, sous la direction de François Bluche, Fayard, 1990, p.613.

（4）J.ミシュレ，『フランス史』IV（大野一道，金光仁三郎責任編集），藤原書店，二〇一〇年，二八七頁。ちなみにミシュレは，王弟殿下妃を聡明で性格もよい女性としてひじょうに好意的に描き出しており，デュマのコケティッシュでエゴイスティックな面の強いアンリエット像とは対照的な肖像となっている。

（5）Jean-Yves Tadié,《Préface》, Dumas, *Le Vicomte de Bragelonne* I, Gallimard, Folio, p.15.

（6）*Ibid.*,p.14.

（7）ノルベルト・エリアス『文明化の過程』上下（赤井，中村，吉田，波田，溝辺，羽田，藤平訳），法政大学出版局，一九七七－一九七八年。同，『宮廷社会』（波田，中埜，吉田訳），法政大学出版局，一九八一年。

（8）Jean-Yves Tadié, *Le roman d'aventures,* PUF, 1996,p.40.

（9）Simone Bertière,《Le personnage d'Anne d'Autriche dans la trilogie des mousquetaires d'Alexandre Dumas》, *Dix-neuf/Vingt,* no5, 1998, pp.67-77.

（10）Tadié,《Preface》, pp.41-45.